



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 板井正齊著『ささえあいの神道文化』   |
| Author(s)    | 冬月, 律   |
| Citation     | 宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 107-113   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/20143">https://doi.org/10.18910/20143</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 書評

板井正斉著

『ささえあいの神道文化』

弘文堂、2011年6月刊、A5判、235頁、4,000円

冬月 律\*

本書は、神道文化と現代的な社会課題をめぐる新たな研究視点の創出を目的として、いま改めて地域社会に求められる神社の役割を「支え合い」を鍵にしながら考察を試みている。それは、日本の民族宗教と称される神道においても、近年の社会意識の変化からの影響を免れるものではなく、既に宗教法人への課税や境内地の管理といった神社の公共性をめぐる問題等、多くの現代的課題が山積しており、地縁意識の変容は、後継者問題や過疎地域の神社が抱えている諸問題を現実化させているとし、そうであるならば、神社神道の共同体的側面にこそ、混迷する現代社会への説明責任でもある一方で、「新たな」神社の社会的役割をどのように見いだすのかという極めて積極的な作業でもある。そこであえて「新たな」と付す役割を、筆者は「神社の底力」と称しつつ、とりわけ神社の持つ「共同体的側面」における歴史的な実績と、自然や地域や人々とのつながりの魅力からその役割を明らかにしようと試みているのである（以上、はじめに・おわりに）。

少し長くなるが、まず内容目次を紹介しておきたい。

## 第一部 神道文化と現代的な社会課題をめぐる研究視点

### 第一章 神道文化に基づいた「地域・福祉・文化」研究の特質

いまなぜ神道文化・福祉文化なのか／地域福祉へのながれ／福祉の文化化／神道文化に基づいた「地域・福祉・文化」研究

### 第二章 「地域・福祉・文化」研究の背景—福祉から社会貢献—

はじめに／平成十年以前／平成十年度 皇学館大学神道研究所シンポジウム／平成十二年度 皇学館大学神道研究所公開学術シンポジウム／平成十七年度 国際宗教学宗教史会議第十九回世界大会／平成二十年度 日本宗教学会第六七回学術大会パネル／成果と課題

### 第三章 福祉と社会貢献の概念整理

神道文化と現代的な社会課題をめぐる議論の現在地／福祉と社会貢

---

\*國學院大學大学院文学研究科神道学・宗教学専攻博士課程

献の混同／福祉と社会貢献の混同の文脈／「神道と福祉」「神道と社会貢献」を使い分ける研究視点／神社神道の社会貢献を分析する／社会貢献と区別した神道と福祉のとらえ方

#### 第四章 「新たな支え合い」をめぐる伝統的価値観の可能性

「新たな支え合い」をめぐる動向／伝統的な価値観と地域福祉との接点／「新たな支え合い」の形／「新たな支え合い」をめぐる伝統的な価値観の可能性

### 第二部 障害者・高齢者の伊勢神宮とそれを支えるボランティアの 相関性

#### 第一章 問題の所在と研究視点

問題提起／聖地への現代的アクセシビリティに関する分析視点／NPO 法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター／問題の所在と研究視点の要約

#### 第二章 伊勢参宮をめぐる「支え合い」の歴史

誰でも伊勢参宮／「支え合い」の形としての「施行」／参宮を忌まれた存在／病気や障害にまつわる寺社への参詣／旅する障害者をどのように支えたのか／障害者への支え合いをめぐる規制と葛藤／伊勢参宮の「施行」に見る障害者・高齢者の姿

#### 第三章 伊勢参宮する障害者・高齢者の意識から

NPO 法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの三つの事例／車いすでの伊勢神宮参拝シミュレーション／平成十六年度 おかげ横丁電動車いす貸出し調査／平成十八年度 はりふりお伊勢さんお参りサポートボランティア調査／宗教的ニーズと福祉的ニーズの相関性

#### 第四章 支える人々の意識から

支える人々としての観光ボランティアガイド／伊勢神宮における観光ボランティアガイドのバリアフリー意識調査／支える人々の活動動機に見る宗教的内発性／バリアフリーお木曳きへの参加動機／環境因子としての「伊勢神宮らしさ」の多様性

### 第三部 ささえあいの聖地へ

#### 終章 NPO が豊かにする神道文化—伊勢神宮だから参加する人々—

豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて／神社の空間性が地域のケアモデルやSCに影響を与え得る可能性／神社の現状をめぐるデー

## タ／伊勢神宮と NPO・ボランティア／SC としての神社

目次から窺えるように、本書は 3 部構成となっており、第 1 部では本書の研究背景及び目的をはじめとして福祉と社会貢献の概念整理などの理論展開が中心となっており、第 2 部では第 1 部での理論をもとに事例研究として、伊勢参宮する障害者・高齢者を対象に具体的な実証を試みたものを中心となっている。第 3 部ではこれまでの内容に結論として、神社の創出し得る新たな社会的役割を SC（ソーシャル・キャピタル）の概念に着目して考察を行っている。

また、本書は、藤本頼生が『神道と社会事業の近代史』[2009]の中で、神道と福祉の関わりについて近代から現代に至る「神道」と「福祉」、「教化活動」の視点から明らかにした点においては、本書が持つ関心分野と問題意識とのかかわりは深く、その書評のためには両著者の理論性と実証性を超える必要があり、以下では本書における筆者の関心分野や研究意義を中心に紹介しておきたい。

第一部では「神道文化と現代的な社会課題をめぐる研究視点」として、著者の研究が導き出される先行研究の整理と課題について論じられている。つまり、本書のおわりで筆者が述べるように、自らの問題意識について宗教学を中心とした近年の議論から整理することで、従来の神道神学を中心とした神道学の分野での先行研究では扱われにくかった「福祉」と「社会貢献」との接近とその分類を行ったうえで、各々の神社での活動事例をもとに、社会に求められている「新たな支え合い」の構築へ向けて、神社の持つ〈文化的空間性〉に可能性があることを指摘している（以上 220～221 頁）。第一章では、日本人の伝統的な価値観と現代的な社会問題としての福祉が、これまでどのように関わりを論じられてきたかに注目している。とりわけ、1960 年代に提唱された福祉の文化化について未だ定義はなく、研究成果の蓄積も十分でないことも客観的に問題点を指摘している。第二章では、現代神道をとらえようとする新しい研究動向を「地域・福祉・文化」研究の背景に関連する平成 10 年以前、平成 10 年度、平成 12 年度、平成 17 年度、平成 20 年度の学術上の議論から整理し、その成果と課題を示している。研究成果からは、福祉から社会貢献へと問題意識のまなざしを広げながら、複雑化する社会課題への現代神道の役割を他宗教との比較を含めつ

つグローバル化できたと指摘している。しかしながら、福祉と社会貢献の両者が研究を進化させる中でいつまでもあいまいに論じられているという課題も残していることも指摘している（以上 28～29 頁）。第三章では、前章末での指摘に加え、筆者の問題意識に引き付けながら福祉と社会貢献の文脈を整理している。福祉と社会貢献の混同を白波瀬達也による先行研究を引用しながら論じている。結論としては「社会貢献と福祉は同意ではない」とし、さらには「社会貢献」と「狭義の福祉」が同意ではないことをも指摘している（42 頁）。次に筆者が注目したのは「神道と福祉」「神道と社会貢献」を使い分けることにあり、白波瀬の先行研究である「宗教者・宗教団体の福祉活動に見られる包摂バリエーション」を参考にしながら両者の使い分けの可能性について考察するが、その際に重要なのは、藤本頼生が言及した「特に主体が神社、神職ではなくて、一般の人々であるものに注目すること」[藤本 2009：601]であると指摘し、神社神道における社会貢献は、神社や神職が教化を意識しない、もしくはさせない主体的なかわりから見出されるのではないかと考え、それを具体的に考察していくためには事例を丁寧に分析する必要があると述べている（以上 45～46 頁）。第四章では、神道文化に基づいた伝統的な価値観が現代的な地域課題に対してどのように適応できるのかについて、厚生労働省と国土交通省がそれぞれ提示した「新たな支え合い報告書」と「新たな公事業」を概観しながら、私たちが日常生活に直結する社会問題に対して地域を基盤とした「新たな支え合い」モデル構築が喫緊の課題であることを改めて理解できると指摘する一方、伝統的な価値観をとらえてきた宗教学において近年、宗教の枠にとらわれない「思いやり」や「おかげさま」といった普遍的利他的な行動動機に関する研究が注目される中で、筆者の調査した三つの事例から「新たな支え合い」にみる伝統的価値観の可能性について考察を行っている（51 頁）。筆者は、稲場圭信のボランティア活動の利他主義や援助行動研究からの指摘（61 頁）や広井良典の〈文化的空間性〉の活用に関する指摘（62 頁）をくみながらも、三つの事例からそれぞれの支え合いの形をみると、「新たな」と付された意味を時間的な断絶と見ることなく、「思いやり」や「おかげさま」といった伝統的な価値観やそれに基づいて形成された地域文化が、現代的な地域課題に対して、脈絡を変えて適応していると解釈している。筆者のそのような視点については、今回筆者の採り上げた

調査事例を今後も継続的に提示していくことで、より具体的に見えてくるのではないかといった点に注目されよう。

第二部では、「障害者・高齢者の伊勢神宮とそれを支えるボランティアの相関性」として、第一章では、聖地への現代的アクセシビリティに関して、分析視点を宗教学における宗教とツーリズム研究・社会福祉学における福祉文化論を中心とした障害者・高齢者旅行研究に置いて整理した後、第二章で具体的な研究対象として伊勢神宮の車いす参拝をサポートするNPO 法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンターを取り上げ、障害者・高齢者の伊勢神宮参拝の実態を概観している（以上 87～92 頁）。これまでの宗教とツーリズム研究や福祉文化論において、変容する聖なる場所への「誰でももの祈り」を捧げたくとも聖地を訪れることの叶わない障害者・高齢者の旅行に「聖性」「宗教性」へ視点をおいた研究があまりなされていない点に注目し、最近の研究成果を踏まえながら新たな聖性の再構築を試みた（93 頁）筆者の観点は評価に値するであろう。しかしながら、「障害者・高齢者の旅」における多様な分析を試みる筆者の「誰でももの祈り」に焦点をあてた結果、全国の障害者や高齢者の生活からして重要な課題ともいえる「コスト的なバリア」のことは看過しているのではないだろうか。また、筆者の説く新城常三の『社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、1964）を足がかりに階層や身分の構成について「社会的弱者に障害者・高齢者を含めているかどうかわからない」（103 頁）と指摘し、歴史学や宗教学を中心とした寺社参詣研究の動向からも幅広い多様な解釈を試みており、ホスト側とゲスト側において史料の分析からその対象に障害者・高齢者が見えてこない（110 頁）とする筆者の視点は非常に興味深い。さらに、その多様な試みのほとんどが二次資料に頼りながら膨大な蓄積の一部でしかない点などをも冷静に判断し、引き続き精緻にとらえていく必要がある（121 頁）との指摘は同感である。また、第三章と四章では、「伊勢参宮する障害者・高齢者の意識から」「支える人々の意識から」として、これまでの内容を踏まえ、筆者自身が実施した調査を取り上げ、伊勢参宮する障害者・高齢者の意識を中心に考察を行いながら、障害者・高齢者の伊勢神宮参拝において「宗教的ニーズ」と「福祉的ニーズ」の相関性に多様な価値観が存在している点に注目している。さらに、支える側のボランティアの意識における活動動機を個人因子と環境因子の相関性から考察・分析を行うことで内発的な

地域文化に根差した価値観をとらえようとする試みや、「誰でも参拝」が文化化され、その支え合いの効果が持続可能な形を目指すためには「伊勢神宮らしさ」がその鍵であると指摘している点に筆者のオリジナルティがうかがえる。

第三部は終章の「NPO が豊かにする神道文化」として、これまでの調査結果に基づいて、神社の創出し得る新たな社会的役割をソーシャル・キャピタル (SC) の観念を用いて①NPO やボランティア活動といった市民活動と地縁的活動との相関性、②神社の空間性が地域のケアモデルや SC に影響を与え得る可能性、③神社・神職をめぐるデータからの SC と市民活動との関係性、④SC としての神道文化、の四つに分けて考察し、本書の結論としてまとめている (以上、194～195 頁)。

おわりにあたり、本書では、重ねて指摘するが筆者自身の問題意識について宗教学を中心とした最近の議論から整理し、従来の神道神学の研究では扱われにくかった「福祉」と「社会貢献」との接近と分類を行った上で、神社をめぐる活動事例や筆者自身の調査結果を紹介しながら、社会に求められている「新たな支え合い」の構築へ向けて “神社らしさ” “神社の底力” などを用いながら神社の持つ〈文化的空間性〉に可能性があることを一貫して論じている。ただ、本書で検証した伊勢神宮の事例をすぐに地域神社に置き換え難い点や、櫻井治男や小林宣彦が指摘するように、神社がそこに存在することそのものが、地域の支え合いの活性化に果たす機能的役割の実証であるといった点など、検証すべき点が残っていることは筆者も指摘している。しかし、これまでに民族宗教・民衆宗教としての性格と「国家神道」・近代天皇制イデオロギーなどで、今もなお曖昧にされている神社や神道に、さらにこれまでに扱われにくいとされてきた「福祉」「社会貢献」といった新たな視座を付与している。こうした筆者の本書で行った試みは、これまでの歴史的な実績をベースにし、従来の神道が持つ魅力を保ちながら各種データ活用や現地調査を適切に使い分けている。さらに〈新たな魅力〉の要素を取り入れた筆者の研究は、戦後の神道研究において石井研士が指摘した「実証性の欠落」[石井 1998 : 49-50] に対する新たな神道スタディとなり得るのではなかろうか。

## 参考文献

櫻井治男 2010 『地域神社の宗教学』 弘文堂。

藤本頼生 2009 『神道と社会事業の近代史』 弘文堂。

櫻井義秀・稲場圭信編 2009 『社会貢献する宗教』 世界思想社。

広井良典 2006 『持続可能な福祉社会―「もうひとつの日本」の構想』 ちくま新書。

石井研士 1998 『戦後の社会変動と神社神道』 大明堂。